

ずいそう



百行は一信に如かず

鶴岡松生



私の機電技術者としての規範である八田與一氏の功績と、台湾との関係・繋がりを再認識した台湾、烏山頭（うさんとう）ダム訪問と私の社会人としての回想録

今年の9月に商用で台湾を訪れる機会に恵まれ、どうしても訪ねてみたい場所がありました。

それは、台湾、高雄の北部、台湾台南市官田区にその威容を誇る烏山頭（うさんとう）ダムです。

当時日本の統治下にあった台湾内務局土木課に勤務していた八田與一土木技師は、この烏山頭ダムの設計と施工に携わり、干ばつや塩害に悩む嘉南平野を大正9年から10年もの歳月を費やしダムと網の目状にはりめぐらされた給排水路の灌漑施設を建設し、嘉南平野を台湾最大の穀倉地帯に変貌させました。

この水利設備全体が嘉南大圳（かなんたいしゅう）とよばれ地元では、八田技師を「嘉南大圳の父」又は、「台湾農業の恩人」と敬愛し、今でも地元小学校の教科書でも紹介されていることに驚かされます。

日本建設機械施工協会の役割である“建設事業の機械化を推進し、国土の開発と経済の発展に寄与する”を实践した先輩技術者の一人として八田氏を挙げても過言ではありません。

私が「ものづくり」を仕事にしたい。そう思ったのは、超高層ビルや巨大ドックなどが次々に誕生していた学生時代でした。建設会社に入社した私は、やがて自分はどんなもの造りに携わるのだろうかと思いを躍らせたのを今でも覚えています。

建設工事に携わる機電技術者としての私の節目はなんとか超えることができましたが、“土木事業というのは民衆のための福祉である”という信念を貫いたダム技術者としての八田與一氏の功績や人柄は私の業務遂行の上で規範でありました。

今回、その遺構に立ち、新しい発見や感動・感銘を受け、改めて知識や聞き売りでなく自分の目で確認し、感じる事の重要性を痛感しました。

八田技師は、特殊なセミ・ハイドロリックフィル工法を採用したダム技術や、海外へ出向き特殊工法用機械を直接調達するなど技術者とし顕彰される業績だけでなく、学校や病院を建て、家族同居生活を重視し、

作業員への環境配慮に尽力したこと、自ら進んで危険な現場の陣頭指揮に立ち、日本人も台湾人も分け隔てなく対応したことなど、このプロジェクトの成功は、信頼関係を築いた彼の人柄によるところも大きく、エピソードも多く残されています。

私の職務であった機械化施工は、現在に至るまで、様々な場所で幾多の技術を生み出し、建設工事の合理化、省力化、スピード化に貢献してきています。その英知を最大限活かすことこそが、厳しい技術競争、価格競争に打ち勝つ鍵を握っていると思います。

土木・建築を問わず工種も問わず与えられた施工を理解し、機電技術を生かし計画・施工にどう反映させるかが主たる役割と認識し、物造り一筋、失敗あり感動ありの繰り返しであったと回想しています。

土木・建築に拘らず、自由な発想で何が必要かを考え、合理的な施工法やシステムを追求しそれを具現化することで「ものづくり」を体現してきました。

多くの優秀な先輩や同僚・後輩の皆さんに恵まれ、私なりに充実した会社人生をここまで続けることができたとしみじみ感じております。

社業を通じ知りえた社内外の多くの人脈と知見が私の宝であり、業務を遂行するうえでなくてはならない財産であったと思います。

「百聞は一見に如かず」「百見は一考に如かず」「百考は一行に如かず」。これは私が良く使う言葉です。色々聞くより一回見た方が物事の本質を理解できます。ただ見るだけで何も考えず、また多くのことを深く考えたとしても行動を起こさなければ、成果は生まれません。

いま、私たちの置かれている環境は非常に厳しい。しかし、新たな時代を生き残るには、しっかりと物事を見つめ、成果が得られる可能性があれば、失敗を恐れず果敢にチャレンジすることが肝要です。

ただ、このフレーズの続きがあると考えています。“百行は一信に如かず”。何か行動を起こそうとするとき、信頼が醸成されていなければなりません。

それを常に忘れないようにしています。